女性の創造力の産物：中国女文字

Women's Creative Art, *Nushu*, Chinese Women's Script

遠藤織枝*
Orie Endo

Abstract

Nushu, Chinese women's script, was created and transmitted among women in Jiangyong Prefecture, Hunan Province. The script represents women's fascinating creativity and imagination. In this chapter, I will discuss three major issues: (1) the reason why women produced such beautiful scripts; (2) the significance of the shape of the scripts; and (3) the importance of *San Chao Shu* 'Third Day Missives' as well as autobiography written by local village women.

I. 中国女文字の環境

1. 中国女文字の伝播地域

遠藤織枝著『中国女文字研究』（明治書院 2002　p2）から

* 元文教大学教授、Former Professor, Bunkyo University
E-mail: orie8@nifty.com

前ページの図に示すとおり、中国女文字が伝わる江永県は湖南省の南端近くに位置し、広西省壮族自治区と接している。江永県の中でも全県というわけではなく、その東北部の上江墟鎮を中心とするいくつかの鎮・郷に伝播し、隣接する道県の一部にも伝わっていた。この地方は、亜熱帯性の気候で、温暖な時期が長くて水が豊か。そのため、米が年に2度取れる。お茶、野菜、柑橘類など農作物にも恵まれ、食糧には困らない。こうした豊穣な自然環境が女文字の創造と大きな関係がある。水が少なく食糧の生産量が乏しく、食べることに追われている地方であったら、このような文字は生まれなかったと思われる。

この文字は中国では「女書―nüshu」と呼ばれている。しかし、日本語で「女書」と表記すると、「女性の書物」「女性の書いた文字」「女性の書道」などと解釈が分かれるし、発音も「ジョショ」「ニョショ」「オンナガキ」などと複数に読まれる危険があるので、遠藤は「中国女文字」「女文字」の語を用いている。現地の人の話を紹介する場合や、書き手の側に立つような言い方をする際には「女書」の語を使うこともある。

この文字を女書と呼ぶ現地の人たちは、漢字のことを「男書」と呼んでいる。このことは、日本の仮名を「女手」と呼んだために、漢字を「男手」と呼んだのと全く同じ発想によるものである。

2. この地の人々

この地域は2000メートル級の山に囲まれた水田地帯で、複数の民族が共住し、その多数を漢族と瑶族が占めている。この地方の山々は南方に近いためか、第1級保護動物とされる金糸猴・狼・野猪・虎・寒鶏・猴面鷹・石羊など貴重な動物が生息する。こうした環境のもと、おもに漢族が農作業、瑶族が山で漢方の材料を集めるなどの仕事をしていた。このふたつの民族は結婚で交わったり、互いの風俗習慣で交流したりしていて、民族間の対立は少なかった。漢族は真面目で勤勉、瑶族は陽気で開放的、歌や踊りが好き、という特徴があった。女性の衣服も漢族は、紺か黒の綿織物で仕立てた地味な物、瑶族は明るい青の綿織物に刺繍やテープで縁取りをするなどの色彩豊かな物が多かった。民族が違うといっても、村人たちの民族意識はそれほど堅固なものではない。

最初遠藤が訪れた1993年、当時ただ1人となっていた伝承者の陽煥宜に何族かと尋ねたら、漢族と答えてくれた。その後3年ほど経ってもう一度確認したくて何族かと尋ねたら、今度は瑶族と答えた。案内してくれていた県の旅遊局長にどういうことかと聞いたら、県は少数民族自治県になりたくて、住民に換化[1]を勧めているからだという返事だった。つまり、少数民族自治県になれば国家の少数民族優遇政策の適用が受けられるため、県は住民中の瑶族の割合を増やそうとし、住民に漢族から瑶族へ変更することを奨励していたのである。でも、そんなに簡単に出身民族を変更などできるのか、では、そもそも自分の民族を名乗る条件は何なのだとだんだん遡って聞いていった。すると、自分の民族を名乗るのは、全く自己申告だけでOK、その際両親のどちらかの民族を選べばよい、自分の言語、属する民族の年中行事や宗教がどちらの民族のものであるかによって決めてもいい、という極めて緩やかなものであるという説明であった。

3. この地の女性たち

この地には、気に入った少女同士が義理の姉妹関係を結ぶ「老同」「結交姉妹」という風習が

---

[1] 自称する民族を換えること。たとえば、漢民族と自称していた人が瑶族だと換えることなど。

あった。同年の少女の場合は互いに「老同」と呼び合い、異年齢の場合は年が上であれば姉と呼び、下であれば妹と呼んだ。少女たちは気の合った相手が見つかると、姉妹になろうと申し込む。それを受けた少女は相手が気に入っていればその申し出を受け入れて、「結交姉妹」の契りを結ぶ。同い年の「老同」の関係を結べたら、それは「姉妹」よりも、もっといい。しかし、そういう好条件の相手を村の中だけで見つけるのは難しい。ある時は、少女たちが村を隔てて「姉妹」や「老同」の関係を結ぶために、仲立ちをする人もいた。

いったん「姉妹」「老同」の契りを結ぶと、その少女たちは真の姉妹よりも親密な交わりを持った。「結交姉妹」たちは、娘々廟（＝村人に貢献した女性を讃え祀る廟。唐代から伝わる廟もある）の縁日に連れ立って行き、共に「女紅」―糸紡ぎ・織物・刺繍・縫い物・布鞋作りなど女性の仕事の総称―をし、共に遊んだ。陽煥宜に「結交姉妹」のことを尋ねたことがある。陽は、5人で姉妹を結んだことがあると言った。陽には実の姉がいた。その姉と義理の「姉妹」とどちらが良かったかと聞くと、もちろん義理姉妹だったと大声で言った。実の姉は女文字も習おうとしなかった。姉は文字の練習などより外で遊ぶほうが好きだった。義理姉妹たちはみんな女文字ができた、とも言った。「結交姉妹」の関係を結ぶのにも女文字が一定の役割を果たしていたことがわかる。女文字を書ける者同士が姉妹関係を結び、また、姉妹を結ぶと教え・学ぶ機会ができて女文字ができるようになる、と双方向からの関係の中心に女文字は位置していた。

また、この地では、「男耕女織」と言われるように、男性は農作業、女性は家事と「女紅」と、仕事の分業がはっきりしていた。女性は「女紅」を家の中でし、男性は家の外で農作業に従事した。

行事も性別が明確で、4月8日の闘牛節―家から連れてきた牛を闘わせる祭り―は男性だけが楽しみ、吹涼節―1年中のいちばん暑いころ、若い娘と、結婚後日の浅い娘たちが、一番涼しい家を選んでそこに集まる―は女性だけの祭りと、それぞれの祭りは性別で区別され、交わることはなかった。

男性が農作業や行事で外に出ているとき、女性はだれかの家に集まって、「女紅」をし合い、歌を交換し合うなど、一種の文化的空間を持つことができた。「楼上女」という語がこの地にあるが、2階の女という意味で、2階で「女紅」をする女たちがいたことをこの語は伝えている。集落内は2階建ての家が連なっているが、その光も入らない薄暗い2階は、農機具や収穫した穀物を貯蔵する物置きとして使われていた。その中でわずかに明かりが入る小さな窓の近くのコーナーが女性たちが集まって「女紅」をする空間であった。そこで、女性たちは、刺繍の刺し方を教え合ったり、新しい図案や刺繍のステッチを考案したことであろう。織物の技術や縫い物のデザインを交換し合ったかもしれない。そういう女性たちが自由に創造的な時間を過ごせる環境の中で女文字は生まれたと考えられる。

漢族の女性は儒教の「三従の教え」のもと、自分の生涯を自分で決めることはできなかった。結婚は親の決めた相手と否応なくさせられるもので、本人同士は結婚式の当日まで会うこともなかった。結婚は、生家から離れ、家族や友人とも別れてひとり他郷に行かされる悲哀に満ちたものであり、同時にまた、嫁ぎ先では男の子を産む道具とされ、夫の暴力や舅姑のいじめに遭う恐れも強く、女性たちにとっては忌避したいことがらであった。

上記の陽煥宜に結婚したころのことを尋ねたことがある。陽は、結婚式の当日初めて夫となる人に会った、と答えた。こわかった、何を話していいかわからなくてずっと黙っていた、とも言った。結婚したくないと思ったか、と尋ねると、そんなこと考えることもなかった、親の決めることに従うものだと思っていた、との答えであった。

ある村で田の畦道で出会った高齢の女性に、女文字が書けるか読めるかなどの聞き取りをしていて、結婚したのはいつごろかと聞いたら、泣き出されてしまったことがある。その女性が結婚したのはかなり昔のことと思われたが、何十年を隔てていても、そのころを思うと泣き出してしまうほど、結婚はその女性にとって辛いことであったのだ。

いっぽう、瑤族の結婚は違った。女性も相手を選ぶことができた。どちらも好きになった者同士が結婚するという、漢族とは対照的で近代的なものであった。

その結婚が決まると、義理姉妹が、嫁ぐ娘の家に半月前から共に住む風習があった。嫁ぐ娘との別れを悲しみ、少しでも長く共にいたくて起居を共にした。この間に娘たちは刺繍を散らした花嫁の衣装を作り、布団を縫って嫁入り道具を調えた。

結婚式の前の3日間は、嫁ぐ娘を囲んで、送る側の娘や叔母や姪たちが泣きながら歌い合う歌堂という習慣もあった。娘たちは村の中心にある祠堂に集まって歌い合った。「哭嫁歌」がその代表で、嫁ぐ娘がその悲しみを訴えて泣きながら歌う歌であった。その他折々の行事の歌、季節の歌、農作業の歌など古くから伝わった歌と、即興で別れの辛さを歌い慰める歌の応酬であった。

思いをさまざまなことばを選んで言い表し、自分の感情を微細にわたり丁寧に表現できる女性は歌も次々に浮かんでくる。それに応える送る側も、表現力の豊かな人がいれば、歌の応酬はいつまでも続いていく。表現力が乏しい娘の場合は、歌はすぐ終わってしまう。

こうして、共にいて、共に歌い合えれば、互いの思いを伝え合うことはできる。しかし、いったん嫁いで遠く離れてしまったら、思いを通じさせることはできなくなる。歌にした自分の思いをどこかに留めて、それを遠く離れた「結交姉妹」に伝えたいと思う。そのためには文字が必要だった。その必要を満たすために、女性たちは、自分たちのコミュニケーションのツールとしての独特の文字を作ったのだ、と考えられる。

II. 女文字

1. 女文字の成り立ち

新中国建国以前、村人たちの多くは漢字を知らなかったが、村の指導者・役人・知識人は漢字を知っていた。村には漢字は存在していた。しかし、漢字の習得には系統的な教育が必要である。平仮名やアルファベットなど表音文字は、それぞれの文字の音と字形と文字のつなぎ方がわかれば、その言語は表記できる。平仮名だけでも日本語は十分に表現できる。しかし、表意文字・表語文字である中国語は、それぞれの意味のある語を覚えなければ易しい文章でも表記できない。木村英樹（1996：102）は中国語では2500字あれば一応98％のコミュニケーションができると説くが、2000以上もの文字を習得するのは、独学では難しい。易から難、同じ音で別の文字、似た音の文字を集めて教える、偏や旁の意味を教えながら、造字法的に指導するなど、教育のシステムの中で教えられ、そして学ばれるものである。

だから、村に漢字が存在していたからと言って、その存在を知ることと、漢字の用法や意味を知ることとは全く別の問題である。この地方でも事情は同じで、娘たちは漢字の教育を受けたことはなかった。その娘たちの中には、父親・兄など漢字を知る人の娘や妹もいたはずで、その娘たちがいくつかの漢字を、「女紅」のサロンに持ち込んだであろうことは想像に難くない。また、刺繍のデザインからヒントを得たような文字も持ち寄られたであろう。刺繍をしたり、縫い物をしたりする文化サロンで、こういう文字はどうだろう、この音にはこの文字がいい、

そちらの音にはこんな文字がよさそう、と持ち寄った漢字やデザインに音を与えて文字を創っていったのではないだろうか。

漢字がルーツと思われる文字が約80％ある（趙1995b： 88）が、それぞれのルーツとできあがった文字とを比べると、たいていは画数が減って簡略化されている。正確に記憶した漢字を持ち寄ったのではなく、見よう見まねで集めた漢字が元になっていたからであろう。

娘たちが文字を創るという背景には、この地方の女性たちの間に存在する文字崇拝の風潮も関連がありそうである。ある村に織物のできる若い女性を訪ねたことがある。彩りの鮮やかな布を織っていた。自分の結婚のとき持って行く布団用の布を織っているとのことであった。そのデザインとして、当時歌われた歌が織り込まれていたが、そのいくつかの文字は誤字であった。正確には知らなくても、文字を織り込みたいという、文字への憧れがあった。

70代の女性が見せてくれた大きな布団カバーにも図案としてたくさんの文字が織り込まれていた。そこにもやはり、不正確な文字が多く織り込まれていた。

その起源はわからないが、花帯という幅4～5センチ、長さ2メートルぐらいのベルトを織るのを見たことがある。太い竹に糸の束を巻きつけ、一方で自分の腰に糸を巻きつけてその竹と自分とで織機を作って引っ張りながら織っていくのである。その帯の中の模様として女文字を織り込むものが多い。これも帯のデザインとして古くから伝わる女文字の歌の一部を織り込むのだが、こうした織物に文字を織り込むということも、当地の娘たちにとって、文字が日常生活の中で非常に身近な親しいものであったからであろう。

文字を身の回りの品に取り込むというのは、文字を良いものとし、価値あるものとする意識の表れであろう。こうした意識が自らの文字をほしいと願い、作りたいと思う強い希求を生み出したひとつの要因とも考えられるのである。

2. 女文字の特徴

この文字は表音文字で、この地の方言をすべて表現できるだけの文字をそなえている。異体字が多く、350文字とする説から1800文字とする説まで、幅が広い。異体字が多いのは、この文字が規範となる教科書も学校もないところで教えられ、習いたい人はよく書ける人のもとに通って習得し、その人がまた教えるという個人的なルートで伝授されてきたからである。基準となる字書もなく、個人的な書き癖や、好み、記憶違いなども経てきた結果、文字の音や使い方は同じだが、少し形が異なるという異体字が多数生まれたのである。

この文字を1980年代から研究している清華大学の趙麗明は、文字を整理して基本字に絞り込むと350字ぐらいであるという。趙も最初のころは600～700文字と言っていたときがあるし、90年代初めの著書では、1100文字以上のリストを示している。それが最近では異体字を集約して基本字という概念を提示し、その数は350ぐらいだというのである。

字書を作ったりリストを示したりしている研究者は多いが、その中で最も多い数を示しているのは、北京の中央民族大学の元教授陳其光である。陳は2006年に『女漢字典』（中央民族大学出版社）という女文字の字典を刊行したが、その中では3400文字示したと述べている。個々に見ると、たとえば、同じ字形でまっすぐ立っているもの、右に傾いているもの、左に傾いているものをそれぞれ別の文字として3字と数えている。筆者不明の古い三朝書―4の（1）で詳しく述べるが、女文字を書いて嫁ぐ娘に送る冊子のこと―から、文字を収集して整理しているが、陳のように数えれば、筆者の数だけ文字の数が存在することになって、その数はいくらでも増えてしまう。傾斜が違うのは筆者の書き癖によるもので、手書きで文字が書かれる時代には当然起こることである。傾斜が異なっても、同じ音を示し、同じ意味や語を示すのに使われるの

であれば、同じ文字とすべきであろう。

遠藤が何艶新の文字を元にして、数えたところでは約450字であった（遠藤 2002: 292-330）。

文字の字形は、縦長の長方形で、文字の線は右上から左下に流れている。漢字の「一」は左から右に線が書かれるが、同じ字に基づく［丿／i^{5}／i^{5}］の文字は右上から左下に書かれるのである（文字の後のi^{5}などの記号は左側が上江墟音、右側が城関音）。

女文字の字形は、［／$t'au^{21}$／$t'ou^{44}$ $t'ou^{21}$］のように縦長の菱形が特徴で、［／$t'ɔ^{33}$／$t'ø^{44}$］のように漢字にはない「○」を多く使う。また［／pa^{33}／pa^{44}］のように「・」が多く、刺繍の影響と思われる文字がある。刺繍では花の雌しべなどを表象する際にプレーンナット・ステッチとかフレンチナット・ステッチなどの点のような刺し方がある。それらは刺繍の空間をにぎやかにし、美しくするために刺すことがあるが、［／$pioŋ^{33}$／$pioŋ^{44}$］のように、線画が少なくて淋しいと思われる箇所に点が加えられている場合が多い。こうした文字には刺繍の影響が見られるのである。

この文字はまた、細くて小さいほど良いとされ、くずしたり、続けたりして書かれることはない。美しく繊細で端正な文字を書ける人は優れた書き手として尊敬された。1980年代にこの文字の存在が世間に知られて、研究者たちが駆けつけたとき、この文字をよく知る女性が2人いた。義年華と高銀仙である。義は文字がよく書けるだけでなく、刺繍も良くできて、晩年は生活に困窮し、刺繍でわずかに収入を得ていた。陽煥宜は、興福村の義早早の所へ行って習ったと言うが、習うときは毎回書いてもらって400文ぐらい払ったと言っているし、教えてくれた義早早のことを、「小さくて良い字が書けた。他の村から書いてもらいに来る人が多かった。頼まれて書いてあげると、お金をもらっていた」と伝えている（遠藤 2002: 93）。

3. 文字の習得

この文字が書けることは実益にも通じていたのである。だから陽煥宜は、「姉は習わなかったが、自分はがんばって習った」とも言っているのである。

この文字の習得については、陽煥宜のように教え手のもとに通ったり、家で母・祖母・叔母などに教わったりするが、当時の娘たちがだれでも読み書きできたわけではない。途中まで教わったが、覚えきれなくてやめたという女性にたびたび出会っている。7人「結交姉妹」がいて、その2人はマスターしたが、あとはドロップアウトしたと、その5人の中の1人だった女性は悔しそうに語った。習得した娘は頭が良かった、時間もあった、自分は途中で母親に死なれて家事をしなくてはならなくなり、時間がなくなって途中で諦めなければならなかった、と。

村の娘の中でも、多いときで半数ぐらい、一般には2割ぐらいが書けたと、現地で最初に女書の収集を始めた周碩沂は述べている（遠藤 1996: 22）。

学校もなく義務的でもないから、本当に習いたい娘だけが習ってその一部が習得し、それを使って三朝書を書き、なにがしかの収入を得ることもあった。マスターした女性たちが、次には教える側に回り、こうして代々伝えてきた。教科書のような動かない規範があれば、文字の伝承もスムーズに行くだろうが、それは望めない。個人の教師の力量や字形や書き癖など個人的な要素に左右されるのは止むをえないことであった。

先に「結交姉妹」の娘たちが、娘々廟の縁日に連れ立って出かけた、と述べた。この娘々廟も女書交流のセンターであった。ここで、娘たちは女文字で書いた祈祷文を奉納する。習得中の娘は、女文字で書かれて前回奉納された祈祷文を持ち帰って、手本にして習い、次の廟の祭りには、習った成果を持ち寄って奉納するのである。このように、娘々廟は、先輩女性の書い

た文字を手本にして、後輩もマスターしていくという女文字伝承の仲介場であった。

筆記用具は、筆の毛を中心部だけ残したもの、あるいは竹の先を削ったもので、それに墨をつけて書かれた。

女文字の発生年代について、趙麗明は、たとえば［[illegible]／saŋ^{33}／saŋ^{44}］のルーツと考えられる文字は「双」で、「双」は、宋代に楷書「雙」から簡略化された文字であるところから、女文字も宋代以降に出現したものであろうと推測している（趙 1989: 74-75）。武漢大学の宮哲兵は、県誌や族譜を調べた結果として、明末清初と推測している（宮 2001: 21-22）。

遠藤がある村で入手した三朝書を北京歴史博物館の古書籍の専門家に鑑定を依頼したところ、使われた紙や布、筆の質などから、200～300年は経過しているだろうとのことであった（遠藤 2002: 32-35）。山や河を隔てた多くの村に存在する三朝書が、その大きさ、綴じ方、作り方、デザインなどが一定していることから、それだけ広く同じものが伝わるにも100年単位の時間は必要とされるだろうから、少なくとも200～300年の歴史はあるものと遠藤も推測している。

4. 女文字で記録したもの

I.3.でも述べたとおり、この地方では、意思や感情の表現として歌の形をとることが多かった。5音節か7音節で1句となった歌を連ねて思いを伝え、悲喜の感情を表現した。それらを内容によって分けると、1）三朝書　2）結交書（＝結交姉妹の関係を結ぶときの申し出や受諾などを書いたもの）。3）自伝　4）伝説叙事作品　5）謎謎　6）民間に伝わる歌　祭祀歌・農業の歌・四季の歌・寡婦の歌など。7）翻訳作品　静夜思・梁山伯と祝英台・売花女など　8）「姉妹」間で交わされた書信、などでそれらが女文字で表記された。女性たちは、書かれたものを見ながら1人で、または数人で一緒に歌った。したがって、この文字の存在は村の人々には明らかにされており、一部の人の言う秘密文字ではなかった[2]。

以下に女文字で書かれた作品の代表的ジャンルである、三朝書と自伝について述べる。

（1）三朝書

（a）三朝書の体裁

嫁いだ娘は初めの2日間は食事が取れなくて、3日めに初めて食事ができた。竹内実（2009：76）には、旧式の結婚を紹介している1節があるが、それによると、「新婚3日め、新婦は夫の家のひとに挨拶する。実家で花轎に乗ってから、ここではじめて口を開く（「開金口」という）」と記されている。3日めに初めて食事ができるのは、江永県にかぎらず、中国に一般的な風習だったようだ。

そのため、3日めになると、実家からすぐ食べられるように調理した食事が届けられることになっていた。届けられるものは食事のほかに、婚家の舅・姑・小姑などへの土産物も含まれていた。嫁いだ娘に対しては、村に残った義理の姉妹や母親・叔母・実の姉妹・従姉妹などから、思いを込めた歌を書いた冊子が贈られた。この冊子は3日めに届けられるところから三朝書と呼ばれた（写真1参照）。

---

[2] 2002年6月26日の*The Asahi Shimbun=Herald Tribune*は “Battling tough odds to save sworn sisters’ secret script” と見出しをつけた。また2006年10月7日のNew York Timesは、陽煥宜の死を報じる記事に “Yang Huanyi, the Last User of a Secret Women’s Code” と見出しをつけた。

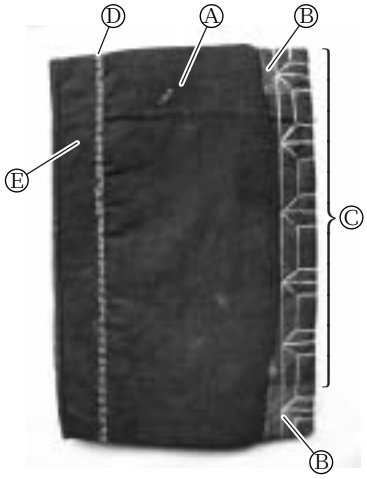

写真1

三朝書は、表紙の材質・布の使い方と縫い方・装飾のテープの扱い・綴じ方・サイズなどがほぼ一定している。表紙は黒か紺の綿織物で作られる。中には豚の皮をなめして黒く染めて表紙にしたものもある(Ⓐ)。布の表紙の場合は、右上と右下の角に赤い四角の布が当てられる(Ⓑ)。布の表紙の間には、袋のように折った10数枚の紙が挟んで綴じられる。その綴じ方が独特で、普通の中国の本の綴じ方より遙かに精巧に美的に綴じられる。刺繍の一種のような綴じ方である(Ⓒ)。

次に表紙の左側約4分の1の所に細いテープが縫いつけられる(Ⓓ)。黒や紺の地味な表紙のアクセサリーである。その左側の4分の1の布は裁ち目が真ん中の部分と異なっている(Ⓔ)。バイヤスに裁たれているのである。表紙を何度も何度もめくっても擦り切れないようにバイヤス布が用いられているのである。真ん中部分と左側部分と布を裁ち違えて、縫い合わせた箇所の上からテープが当てられているのである。すなわち、Ⓓのテープはアクセサリーであると同時に、縫い目を見せないための覆いの役目を果たしている。

表紙をめくると、裏表紙には赤い紙が貼られている。結婚式に贈られる冊子だから赤い紙が使われている。中には10枚程度の袋とじにした紙が綴じられるが、その紙のうち、3枚6ページにだけ歌が書かれる。残りの7，8枚は白い紙のまま残され、文字が書かれることはない。その白い紙の間には刺繍糸や切り紙の見本、刺繍の図案などが挟まれる（写真2)。

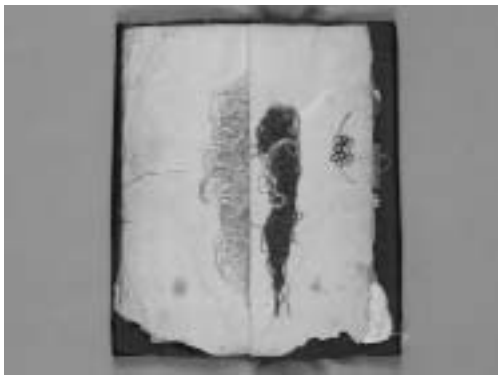

写真2　三朝書に挟まれた刺繍糸

文字は右上から下に、縦書きで書き始められ、5文字か7文字で1句の歌を連ねて書かれる。1行は10文字から12文字で、句による改行はない。

三朝書によっては、紙の中央に模様が描かれ、それを囲むようにして歌が書かれるものもある（写真3）。

写真3　イラスト入りの三朝書

その模様は、刺繍の図案と共通するものが多く、イラストの役を果たしている。また、各ページの左右の隅に赤い切り紙で飾られているものもある。赤い紙を重ねて花模様などに切って、それでページのコーナーを挟むのである。

三朝書はこの地の女性たちの創造力の粋を集めた集成版である。織物・縫い物・刺繍・切り紙という手工芸の世界を通じて、女性たちが自ら創成した文字でその思いを全開させているのである。

(b) 三朝書の内容

まず、1999年1月鳳田村で入手した三朝書の歌の最初のページの日本語訳を紹介する（／は句の切れ目、改行は原文のまま）。

第1ページ
家の前で詩作をめぐらし／ ご門の前に
祝賀を奉じます／ご一家様には愁いも煩いもなく／
日々お喜びの多いことを／兄嫁として微意を伝えます／
三朝にあなたにお会いします／おととい別れてから
会うことできず／いてもたってもいられずに／気を病むばかり
若くて嫁に行かされて／娘の日が早くも終わった／想えば
小さいときから睦まじく／若いあなたと年上のわたし／
あなたを嫁かせてその後は／もの言うたびに

このような歌が、6ページにわたって書き綴られるが、その内容のパターンはだいたい決まっている。

書き出しは、上の例で「家の前で詩作をめぐらし」と始められたように、

「筆をとって詩を一首つくります／三朝にことばを書いてあなたに会いに行きます」
「泣きつ愁いつ詩を作ります」
「筆を執り手紙を認め／ 嫁ぎ先へお届けします 」

などと書き始められるものが多い。「詩作をめぐらし」「詩を作ります」「手紙を認めます」「筆を執り」と、まず、書くことを宣言するのである。普通の手紙を書くとき、我々は気候の挨拶や安否を問うことから書き始めるが、「これから書きます」のように書くことをそのままメタ言語で表現することはない。この地の女性たちがこうした文章で書き始めるということは、この文字を使って思いを書くということが特別のもので、特に重要なもの、特に誇らしいもの、と考えられていたことを表わしている。

結婚式の3日めに届けるのであるから、その初めの部分に上の例の「祝賀を奉じます」のような結婚を祝うことばが来るのが普通と考えられるが、直接に祝いのことばを述べているものは少ない。

「良縁に恵まれ、いい境遇になることを祝います。」
「わたしはここに認めて言います／とりあえず　まずおめでとう」

などがあるが、心から相手の結婚を喜んで祝っているような文脈ではない。別れたくないのに無理やり引き裂かれるのだから、祝う気持ちは起こらないのだろう。そのため、冒頭の語句の後すぐ、別れを嘆く言葉になるものが多い。嫁ぐ娘と別れた寂しさや悲しみを切々と訴えることになる。

「おととい別れてから会うことできず／いてもたってもいられずに／気を病むばかり」
「夢の中でもいつでも泣いて／あなたを思い愁うばかり」
「おとといあなたをばたばたと送り出し／身を翻して家に戻れば涙あふれます」

と別れた後の寂しさを訴える。それ以後は、相手との楽しかった日々や、相手や自分の生い立ちを語る。姉妹として刺繍を教えてもらったのに、もう教えてくれる人がいないと嘆くのである。

「思えばあなたとよく付き合って／言いたい放題言い合って」
「姉さんがいろいろ教えてくれて／真心込めて面倒見てくれた
　何を持っても手につかず／刺繍針出してもだれが教えてくれるでしょう」

つづいて、相手の嫁ぎ先を美化し、相手の結婚が幸せであることを願うことばが展開される。

「ただ望むあなたの夫が優しくて／水が田と池に満つことを」

婚家での幸せを願うが、それが実現する保証はない。そこで相手の悲しみや寂しさを慰めることばへと方向が変わる。そのとき、「娘の日は終わった」という表現がよく使われる。

「若くて嫁に行かされて／　娘の日が早くも終わった」

「くよくよせずに遠くを想い／　娘の日が終わっても泣かないで」
「あなたが娘の日が終わるのが惜しい」

この地の娘たちは、前述のように、気の合った娘同士が集まって「楼上女」として自由な時間を持つことができた。幸せな娘時代だった。それまでの「娘の日」が結婚で終わるのだから嘆きは大きい。意の添わぬ結婚で、無理な性生活を強いられることを嘆くことばでもあったろう。
　嫁ぎ先の姑やその家族に、嫁入り道具が少ないことを詫びたり、ふつつかな娘をよろしくと頼むのもある

「何も知らずにお宅に嫁ぎ／ お姑さん妹よろしくお願いします」
「こちらは礼がままならず／嫁入り道具も不十分／贈り物も足りないがお許しを」

ここでは、歌が向けられる相手は嫁ぐ娘ではなく、婚家先の人々に変わっている。さらに、その関連で婚家での娘のあり方に言及し、再び娘に向かって婚家の人たちに仕えて、不満を抱かずいい嫁になれと教え諭す句が続くのもある。

「安心して嫁いで礼儀正しく振舞って／愁いを払って皆さんに仕え」
「静かにそちらに座って心乱さず／ 愁いを払って他郷に住んで／
　笑みを浮かべて皆さんに仕え／ わがまま言わずに 気を穏やかに他人と接し」

と懇切に身の処し方を教えている。2番めの例は、実の姉から妹に当てたものである。婚家での娘の立場を考えてできるだけ自我を抑えて摩擦を起こさない生き方を勧めるわけで、結果としては諦めと忍従を強いることになっている。
　送る側の自分のことを運が悪いとかこつものもある。中でも男の子が生まれなくて辛い思いを訴えるものが多く、次の歌は、夫につれなくされ、妾を入れて一緒に住まされるという嘆きを歌っている。

「日々の暮らしも辛くて憐れ／　夫つれなくわたしをいたぶる／
　昔の情けはどこへやら／わたしをただのよそ者として／
　一心妾と睦み合い／以前の夫婦の恩を忘れる／
　かわいい息子さえいれば／わたしも頼りにできるのに」

嫁ぐ娘に贈る冊子に自分のほうの不幸ばかりを並べ立てているようだが、これもひとつの三朝書の真実である。相手のことも自分のことも区別できないほど辛さや悲しみは共有できるものであり、共感できるものであったのだろう。こうした境遇の女性たちを周囲に見てきた三朝書の筆者たちは「女は無用」といい、「男の子がほしい」という。
　両親や友・姉妹と別れたくないのに、自分たちが女に生まれ、その女は嫁いで家を出るものと決められているから、別れなければならなくなる。女は嫁ぐもの、家を出るもの、と決めた人はだれだ、そういう理不尽なことを決めたのは天であり、皇帝であり、朝廷だと、女たちはその根源を突き止める。

「女と生まれて　ほんとに無用」

「間違って女に生まれてほんとに憐れ」
「朝廷の決まりは理にあわない」

娘に生まれて無理に家を出されること、娘時代の「結交姉妹」の契りを切られることは、男であったらそういうことはないのに女だけが被るのだから不合理だと、だから、それを作った王や朝廷を恨んでいる。「清朝」や「朝廷」という、時の朝廷を表す語が庶民の女性の一般語彙にあって、喜怒哀楽を訴える歌の中に使われているのも興味深い。と同時にこの三朝書の作られた時代が清代かそれ以後という枠をはめるのに役立っている。

最後は、早く里帰りをして戻ってきてほしいという希望を表明して結びの句とする。

「そちらの親さんの許しを得て／早く里帰りして心を静めてください」
「ご両親に早く許しをもらって／二、三日早く帰ってください」

以上見てきたとおり、三朝書に歌われる歌は、「書き始め→別れの悲しみ→共に過ごした日々を懐かしむ→婚家に恵まれたのを喜ぶ→嫁ぎ先の人に未熟な娘のことを頼む→天の神の決めた制度を恨む→女は無用→早く里帰りを」のような流れで構成された。しかし、それぞれ贈る相手や、書く人によって、重点の置き方が異なり、以上の要素をどれもが全て満たしているわけではない。陽煥宜は娘時代に頼まれて三朝書を書いたことがあるという。どういうことを書いたかと尋ねたら、「嫁ぐ娘の境遇や家族のことを詳しく聞いた、八卦で占って、できるだけ良いことを書くようにした」と答えた。それぞれの事情をわかった上で、その内容を歌の形式にし、歌いやすいものに仕上げていったわけである。三朝書の書き手たちは詩人でもあった。

(2) 自伝

この地方には、女文字で自分の苦悩や悲哀を訴える長文の自伝を書く女性たちがいた。その中の2篇を紹介する。(a) は、この文字の優れた伝承者として80年代の後半に活躍して1991年に没した義年華の、626句4382文字におよぶ長編作である（遠藤1997：56-107)。(b) は1994年に遠藤が偶然出会えて今では最後の伝承者となった何艶新が1997年に書いた202句2828文字の「自伝書」と題する作品である（Ibid.)。

(a) 義年華の自伝の概要

時系列の順に並んでいないが、まず最近の、娘夫婦の虐待に耐えかねて政府に訴えるところから書き始められている。郷政府の決定で女書教室が開かれるようになり、義が教師となって教え始める。そこに孫も来て習う。その孫が1か月後には自分で教えると言いだす。郷政府からの謝金は孫が取りに行き、自分には一銭もくれない。さらに孫に家に金を入れろと脅される。そこまで現在のことを述べ、次から改めて生い立ちを語り始める。

祖母は5人の子を生んだ、母は28でやもめになった。早世した父にかわって娘3人を育ててくれた。

17歳のとき桐口村の蘆の家に嫁ぐ。夫は郷に勉強に行っていてたまにしか家には戻らない。4年後にやっと長女が生まれて喜んでいたある日、姑に卵を食べたと疑われ叱責を受ける。義が食べていないと否認すると、姑は怒って土間の土を嫁の口に押し込んだ。夫が帰ったとき、その誤解を解いて恨みを晴らしてほしいと夫に訴えるが、夫は、姑に忠実に従い我慢するのがいい嫁だと逆にたしなめにかかる。

その後、待望の男の子が生まれた。これで安心、息子が生まれて幸せと思う暇もなく、息子の背中にひどいできものができた。治療に何十万も費やし財産もなくしてしまったが、その甲斐もなく息子は3歳半で夭折する。悲しみに泣き暮れる。その半年後に次女が生まれる。翌年夫が急死する。そのころ、日本軍が侵略して、2女を抱えた寡婦は山地を逃げ惑う。

1949年8月には解放軍がやってきた。解放されて土地改革で土地も得られたが、男手がなくて耕せない。人民公社で産婆として働かされて、何十人かの赤子を取り上げた。長女を嫁がせた。次女にも縁談が持ち上がり、その相手の息子を養子にもらうことで話がつく。跡継ぎができて安心したのもつかの間、娘に再婚せよと迫られ、白水村の男性の所に再婚する。幸い夫も夫の娘もよくしてくれて幸せになれたと思ったが、17年後に夫は病死して、また娘夫婦のいる桐口村に戻った。

80年代初め、女書が書けることがわかってテレビ局の取材や、アメリカからの研究者が家に住み込んだりした。病気になっても娘たちは薬も飲ませてくれない。早く死んだ方がいいと言われる。どうか政府は私を助けてほしい、養老院でも入れてほしい、そこで安楽に女書を書いて余生を送りたい。

(b) 何艶新自伝の概要

父親の一家はめぐまれた家族で一時は幸せだった。父の兄弟は3人いた。

父は何艶新が1歳半のとき地主に殺された。母親は実家に何艶新を連れて帰った。祖父が怒って、母と共に地主を訴えに郷の役所に出向いた。役人のところにはすでに地主の手が回っていて、役人は取り上げてくれなかった。泣く泣く家に帰るが、2人はまた上の裁判所に訴えるために桂陽州に出向く。ここの役人は清廉潔白で、事件を取り上げて、郷政府に犯人の逮捕と補償を命じた。下級政府は4人の犯人を捕らえて水牢に入れた。そのころ、日本軍が侵略して、各地を破壊したため、これを幸いと犯人たちは牢から逃げ出す。補償も得られない。怒りの中に祖父は憤死。

解放後、毛主席の指導で父の仇を討ってもらい、母子は元の家に戻る。荒らされたままの家に母は泣き伏す。土地改革で土地は与えられたが、耕すにも種を播くにも頼む人もいない。母は自分を連れて再婚。子どもを生んでもすぐ死んで、また村に戻る。

娘の艶新が成長し、母は村のある男性と結婚を決めてきた。この相手とでは自分の将来が開けないと娘は拒む。1週間泣いて訴えたが、母親は育てた恩を忘れた不孝者となじる。遂に諦めて結婚を承諾する。幸い子宝に恵まれて、一家はしばし賑わいを取り戻すが、母が82歳で亡くなる。そのうち夫が大病にかかる。入院させて、寒い病院のベンチに寝て看病するが、夫は自分に金を使わないから病気が治らないと責める。罵言に耐えて年末を迎える。

やがて、女書が書けることが広まり、名声を浴びる、村人たちの恨みの目があつまる。1句書いては涙を流し、いつの間にか夜は明ける。この名は千古に残るだろう。

義年華の自伝からは、この地における日本軍侵略・中国解放・土地改革・人民公社など社会の動きが忠実に伝えられ、ひとつの地方史を知ることができる。当時の村の嫁のおかれた位置が明確に描かれ、また、夫の言う、母親に孝養を尽くすのが第一で、そのためには妻を犠牲にしても当然という夫婦関係も明らかにされる。一方で老境に入っては、娘夫婦からは孝養どころか、無用の年寄りとして虐待を受けることになる。嫁の時代の苦難と、悲惨な老後の両方を背負ってしまった女性の証言として大変貴重な作品と言える。

何艶新の自伝には、父親が殺されて裁判に訴える母親のたくましさが描かれる。この地の女

性の、不正に対して泣き寝入りすることなく、敢然と立ち向かう好例である。

また、娘である何艶新が、母から押しつけられる縁談を拒み悩むあたりは、親が子どもを絶対的に服従させるという儒教的風習の中で、新しい女として、自分の将来を自分で選び取ろうとする意志との葛藤が生々しく描かれる。結局は、旧思想から解放されていない母親からの親不孝との叱責に諦めて結婚を承諾するが、まさに古い道徳規範と近代的自我の確立との矛盾に煩悶する若者の姿が現われている。

III. おわりに

秦の始皇帝の文字統一、韓国の世宗のハングル創成に代表的な例を見るとおり、元来文字は権力を持つものの統治手段として、力を持つ側が創り使うものであり、権力の象徴のひとつであった。庶民の女性がその地域の言語を全て表記しうるほどに体系化された文字を創成した例は世界にない。

中国湖南省の農村の女性が、自分たちのコミュニケーション手段として創成した女書は、現地の女性たちの思惟感情の表出手段として愛用され、結婚後の辛い日々を慰める癒やしの文字として、真に大切なものであった。この文字を美しく書ける女性は、刺繍の巧みな女性と同様にステータスが高く位置づけられ、尊敬されて村人の相談役にもされた。

この文字はまた、後世に、当地の当時の女性の生き方や思いや感情、また、その地の歴史を伝える証言の文字となった。新国家建設後、女性たちが漢字を習えるようになり、また生活習慣もすっかり変わって、この文字も、急速に衰え、今では消滅の寸前に追い込まれている。

漢字を与えられなかった女性たちの創造力の産物である中国女文字は、女性たちが独自に体系的で機能的な文字を作る力があること、また、自らのことばを表記するのに最も適した文字を育てる力があったということを明らかにしている。中国女文字は、文化の創造者・担い手としての女性の力を再確認させる貴重な文化遺産である。

参考文献

＜日本語文献＞

遠藤織枝　1996年　『中国の女文字――伝承する中国女性』、東京：三一書房。

――――　1997年　「97年中国女文字調査報告」、『ことば』18号、現代日本語研究会。

――――　2002年　『中国女文字研究』、東京：明治書院。

――――・黄雪貞編著　2009年　『消えゆく文字――中国女文字の世界』、東京：三元社。

木村英樹　1996年　『中国語はじめの一歩』、東京：筑摩書房。

竹内実　2009年　『中国という世界――人・風土・近代』、東京：岩波書店。

＜中国語文献＞

周碩沂　2002年　『女書字典』、岳麓書社。

宮哲兵主編　1986年　『婦女文字和瑤族千家峒』、中国展望出版社。

――――編　1991年　『女書――世界唯一的女性文字』、台湾婦女新知基金。

――――　2001年　「江永女書是清代的文字」、『尋根』4期。

陳其光　2006年　『女漢字典』、中央民族学院出版社。

黄雪貞　1992年　『江永方言之研究』、社会科学文献出版社。
趙麗明　1989年　「“女書”的文字学的価値」、『華中師範大学学報哲社版』六期。
――――・宮哲兵　1990年　『女書――一個驚人的発現』、華中師範大学出版社。
――――主編　1992年　『中国女書集成』、清華大学出版社。
――――　1995a年　『神州文化集成叢書 女書与女書文化』、新華出版社。
――――　1995b年　「女書与漢字」、『奇特的女書』、北京語言学院出版社。
――――　2005年　『中国女書合集』第1冊～第5冊、中華書局。
遠藤織枝・黄雪貞主編　2005年　『女書的歴史与現状――解析女書的新視点』、中国社会科学出版社。